

知的障害者のオンデマンド型オンライン学習における指導方法の特徴について

—対面型講義との比較を通して—

○川西 邦子
(東京都立府中けやきの森学園)

吉澤 洋人
(東京都立あきる野学園)

今枝 史雄
(大阪教育大学)

菅野 敦
(東京学芸大学)

KEY WORDS: 知的障害 オンライン学習 指導方法

I. 問題の所在と目的

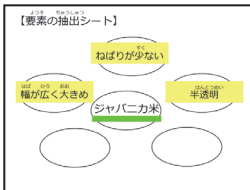
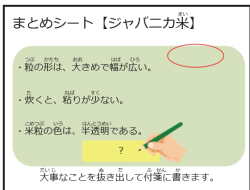
2020(令和2)年より新型コロナウイルス感染症は教育に甚大な影響を与えている。影響の一つに三密回避を目的としたオンライン学習の実施が挙げられる。オンライン学習は、高等教育機関を中心に、ビデオ会議システムを導入したリアルタイム講義、動画の視聴を通して自ら学習を進めるオンデマンド型講義などが取組まれている。

成人期知的障害者の生涯学習支援の取組であるオープンカレッジ東京は2019年度まで対面型講義の実施を通して、知的障害者の学習特性に応じた指導方法の開発に取り組んできた(今枝他,2020)。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響で2020(令和2)年は開催中止となり、現在、動画視聴によるオンデマンド型オンラインのための教材を作成している。しかし、オープンカレッジ東京も含めて、知的障害者への学習支援についてはこれまで対面型授業、講義を主としてきたため、オンライン学習における知的障害者に対する指導方法の特徴は明らかにされていない。コロナ禍における知的障害者の生涯学習の保障を検討する上でも、オンライン学習における指導方法の特徴を明らかにしていくことは喫緊の課題であると言える。

以上より、本研究では、オープンカレッジ東京で実施された「ディスカバー講座」を基に、対面型講義で用いられたスライドと現在作成中であるオンデマンド型オンライン用の学習動画の比較を行う。比較を通して、知的障害者のオンデマンド型オンライン学習における指導方法の特徴を明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 対象: 2019年度に「ディスカバー講座」で実施した「世界の米」の対面型講義スライドと、現在作成中の「要素の抽出をしよう～社会科編～」(仮)のオンライン講義動画である。**2. 講義の流れ:** 対面型講義では最初に講師講義を聞き、講義内容をまとめた資料から、それぞれの題材(例:ジャパニカ米)の特徴を表す言葉(要素)を文章から抜き出し、付箋に書いてシートに貼る活動を行った(資料1参照)。要請に応じて観点を記したヒントカードを配布し、必要に応じて個別に支援した。オンライン講義動画「要素を抽出しよう」は、資料から抽出する方法の習得を目標とした講義である。講師による講義はなく、題材(例:うどん)について説明された文章から、特徴を表す言葉(要素)を抜き出し、付箋に書いてシートに貼る活動を行っている。どちらも、「要素の抽出」という活動の学習場面が共通している。



資料1. 対面型講義で使用した要素の抽出シート

3. 手続き: スライド及び動画開始後の講義担当者の指示内容について、学習準備と講座展開という2場面の共通点

及び相違点を整理した。

III. 結果

1. 学習準備状況: 対面型講義とオンライン講義の学習準備状況の相違点について表1に表す。

表1. 学習準備状況における相違点

	対面型講義	オンライン講義
文具等 必要物品	支援者が事前準備しその都度配布	学習者が自分で用意 ⇒購入方法動画を作成
ワーク シート	支援者が事前準備し配布	学習者が自分で作成 ⇒作成手順動画を作成
学習環境 整備	支援者が適宜言葉をかけたり整えたりする	学習者自身が整える ⇒視覚支援と準備時間を確保

オンライン講義では、学習者が必要なものを自分で用意するための支援や、学習者自身が学びやすい環境を整えることができるような支援を新たに検討する必要があった。

2. 講座展開: 対面型講義とオンライン講義の講座展開における共通点と相違点について表2に表す。

表2. 講座展開における共通点と相違点

対面型講義 との共通点	・例題⇒実践の順に取り組む ・例題は、1行程ずつ例示を見せる。 ・ヒントを活用できるようにし、一人で取り組めるようにする。
オンライン 講義に取り 入れた点 (相違点)	・例題に取り組む前に、例題の全行程が見られる動画を導入。 ・例題以外の活動についても、一指示に対し一動作できるように、活動をスモールステップに分ける。 ・学習者が一動作ごとに正誤を確認できるよう、一行程ごとに確認や評価を行う

オンライン講義では、活動の初めに全行程の動画を取り入れることで、学習者にとって目標が明確になり、活動への見通しや完成への期待感が活動の動機づけになるようにした。また、対面型講義では、適宜支援者が訂正や即時強化できたが、オンラインでは学習者の状況を把握することができないため、対面型講義よりも活動を動作で細分化したり、動作ごとに確認や評価等フィードバックを入れたりして、間違いを最小限にし、学習者が動機づけを維持できるようにした。

IV. 考察

知的障害者のオンライン学習では、教材準備や学習環境の構造化等オンライン学習ゆえの配慮と、ワーキングメモリや学習への動機付け等、知的障害者の学習上の困難さへの配慮が必要であった。これまでの知的障害教育に関わる先行研究でも学習準備に関わる活動はほとんど検討されていない。そのため、オンライン学習では、動画を再生する際の学習準備状況も含めて検討を行っていくべきである。

現時点では、オンライン講義は試作段階である。今後の課題として、実際に本講義動画で知的障害者が学習可能かどうか検証することが挙げられる。その中で、学習しやすい動画の再生時間、学習者の活動スピードや発達段階に配慮した動画構成等も検討していく必要がある。

(KAWANISHI Kuniko, YOSHIZAWA Hiroto, IMAEDA Fumio, KANNO Atsushi)